

平成 30 年 4 月 23 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：木村、田中、手嶋

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより



133号

月例会が開催されました

新年度となりました。また、新しい気持ちを持って、一つ一つのことを行っていければと思います。今年度も改めてよろしくお願いいたします。^^

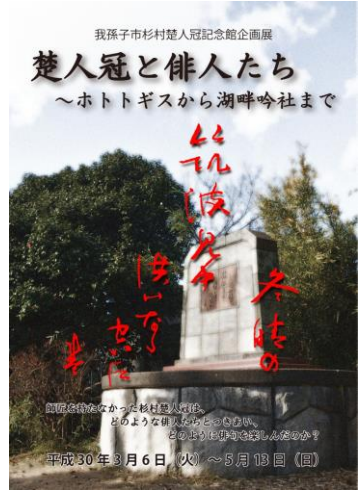
さて、4月4日(水)に月例会が開催されました。現在、ガイドのみなさんは**総勢 30 名**となりました。新しいガイドの方も、それぞれのお一人でシフトに入っていきます。お互いに顔を覚えながら、新しい知識を勉強しながら、みんなで頑張っていきましょう。また、一年よろしくお願いいたします！



楚人冠の俳句哲学

今回は、3月6日(火)～5月13日(日)まで杉村楚人冠記念館で開催しております、企画展「楚人冠と俳人たち～ホトトギスから湖畔吟社まで」について、勉強しました。

この企画展では、楚人冠自身が作った俳句も紹介していますが、それ以上に、楚人冠と交流した俳人たちを紹介することにも力を入れています。俳句を通じた人脈形成を通して、楚人冠の俳句哲学を学んでいきます。



●杉村楚人冠の俳句

まず、楚人冠の俳人としての特徴は、特定の師匠を持たず、独学で俳句を楽しんだことにあります。普通、俳句を学ぶのには、作った作品を師匠に頼んで見てもらいますが、楚人冠は師匠ではない4人に添削してもらいました。師匠を持たない代わりに多くの人の意見を取り入れ、作られていることがわかります。それは、逆に俳句界での楚人冠の交流の広さを示しています。

楚人冠はたびたび、俳句をやらないと自称していましたが、実際は俳句を作っています。なぜでしょうか？

「俳句を知らず俳諧を解せずただ俳境を楽しみ俳趣を愛す私かに俳句を作らぬ俳人をもって自ら任ず」(楚人冠自筆書幅：右写真)

⇒俳句を作ることよりも、「俳境」「俳趣」が大切、という哲学を持っていたことがわかります。

俳諧といふものは、一種のライフそのものであつて、ある思想を十七字にまとめるといふやうなことは、寧ろ第二義に落ちたものといはれぬだらうか。(「俳句を作らぬ俳人」『楚人冠全集』第16巻十三年集)

楚人冠にとって「俳諧」とは「ライフそのもの」でありました。だからこそ、楚人冠が我孫子に移住したあとに多くの作品を残した意味は大きいのです。

●ホトトギスの俳人たち

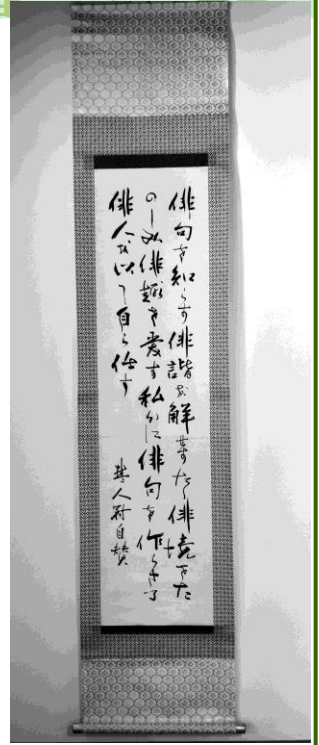
交流した人の数でいえば、やはりホトトギスの俳人が多かったと言えます。

今若し私が是非とも或る一派の仲間入をしなければならぬとなつたら、私は一も二もなくホトトギス派に就いて虚子の門下に参ずる。病人がよく流行る医者に就きたがるのと同じ心理である。(「門外季観」『楚人冠全集』第16巻 十三年集)

⇒仲間を多いほうがいい、という考えであり、作風については言及していません。

○高浜虚子

正岡子規の流れをくみ、ホトトギス社を東京に移転して発展させます。花鳥諷詠の伝統的な作風です。



楚人冠が京都で教師をしていた明治29年ごろ、関西の若い同人が集まった京阪俳友満月会以来の関係でした。

沼べりの寒さを愛したりけんか 虚子

楚人冠句碑の除幕式に際しての献句です。沼べりの暮らしを愛した楚人冠を表現しているものと思われます。

○赤星水竹居

小岩井農場、丸の内ビルの経営を成功させた三菱地所部の幹部。ホトトギス社の丸の内ビル入居を機に虚子について俳句を始める。楚人冠とはロータリークラブで親しくなった。故郷の熊本県八代市鏡町に立つ句碑は、楚人冠句碑と同じく中央から右、左の順に読ませる書き方をしている。

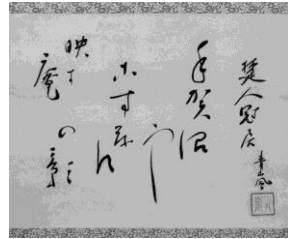
○永田青嵐

関東大震災後の東京市長を務め復興にあたるなど政官界で活躍しました。虚子同様、楚人冠とは明治29年の満月会以来の付き合いになります。

楚人冠居

手賀沼やこすもす映す庵の影
青嵐

題のとおり、楚人冠邸の様子を詠んだ句。



○水原秋櫻子

ホトトギスの4Sと通称されたほどの代表的歌人だったが、のちに虚子から離れ、抒情性を強調した新興俳句運動を始めました。手賀沼へも吟行によく訪れていたそうです。

○山口青邨

東大俳句会の一人。故郷の岩手県で俳誌を主宰するなどの縁があり、その旧居は岩手県北上市に移築。

このように楚人冠以外にも、ホトトギスの面々が手賀沼へ多く訪れ、俳句を残しています。当時の俳人にとって、手賀沼は情緒あふれる場所であったと言えるでしょう。

●独自の道を拓いた俳人たち

自ら俳誌を主宰し、そこに楚人冠の投句を受けていた俳人たちも中にはいました。

○飯田蛇笏

最初ホトトギスで活躍しましたが、故郷である山梨県境川村に帰郷した際、ここで俳誌『雲母』を主宰し、息子龍太とともに親子俳人として知られています。楚人冠は自分だけでなく、朝日俳句会の仲間とこそって蛇笏の『雲母』に投句していました。

○伊東月草

新傾向俳句の提唱者大須賀乙事に師事、のちに俳誌『草上』を主宰しました。『草上』もまた楚人冠が盛んに投句した俳誌です。

この状況を鑑みるとホトトギスの虚子、雲母の蛇笏、草上の月草と、楚人冠にとって投句の前提は、作風や派閥ではなく、その主宰者との交流であり、楚人冠の俳句は人付き合いの一つであったのではないかと。まさに前述のライフそのものであります。

●楚人冠の道を継ぐ ～湖畔吟社

楚人冠の哲学そのままに、楚人冠は俳句の指導はしませんでした。それは、主眼は「集まる」ことにあると考えられます。⇒楚人冠が中心になって作った湖畔吟社の青年たちのネットワークこそが財産！

俳句会とはいふものの、これを指導する先生もなければ、随つて、ここから大俳人を出さうといふ野心もあるわけでない。ただぼんやりと集まるかばかりに、俳句を看板にしたまでである（「湖畔吟社」『楚人冠全集』第5巻湖畔吟）

* * * * *

楚人冠が重視したのは、俳句をとおして人と交流することでした。湖畔吟社もその延長上にあります。楚人冠が我孫子の青年たちに望んだのは、俳味のある生活であり、将来有望な青年同士が俳句をとおして交流することであったといえるでしょう。

次回の月例会は・・・

次回は平成30年5月1日(火)9時30分から新館で行います！！

※訂正※ 4月30日(月)が振替休日のため、翌日の平日はお休みです。そのため、5月1日(火)は休館日でした。すみませんでした。シフトに入っていた方はお休みとなります。お手数おかけいたしますが、よろしく願いいたします！(>_<)